

あと・く おと

一社会的孤立を緩和

A22AB033



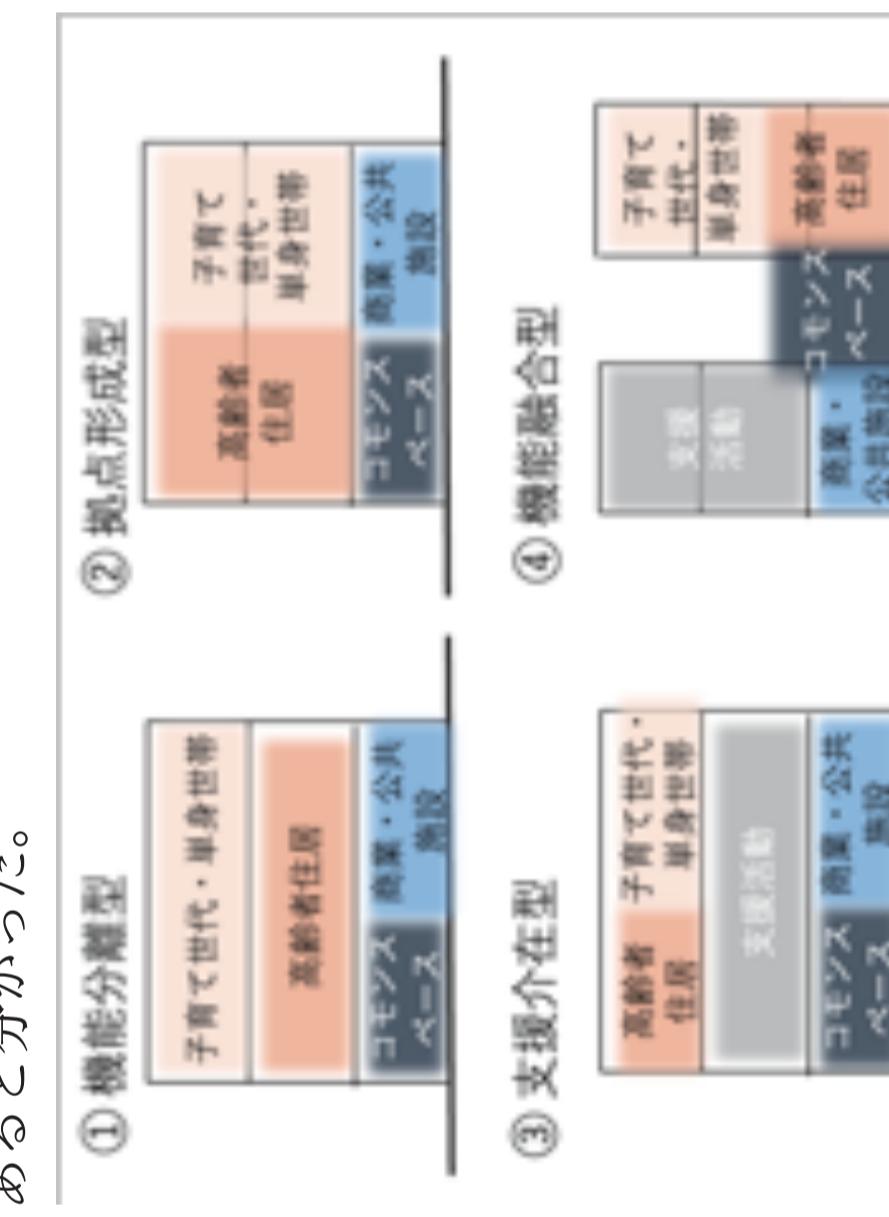
01. 背景

02. 調査

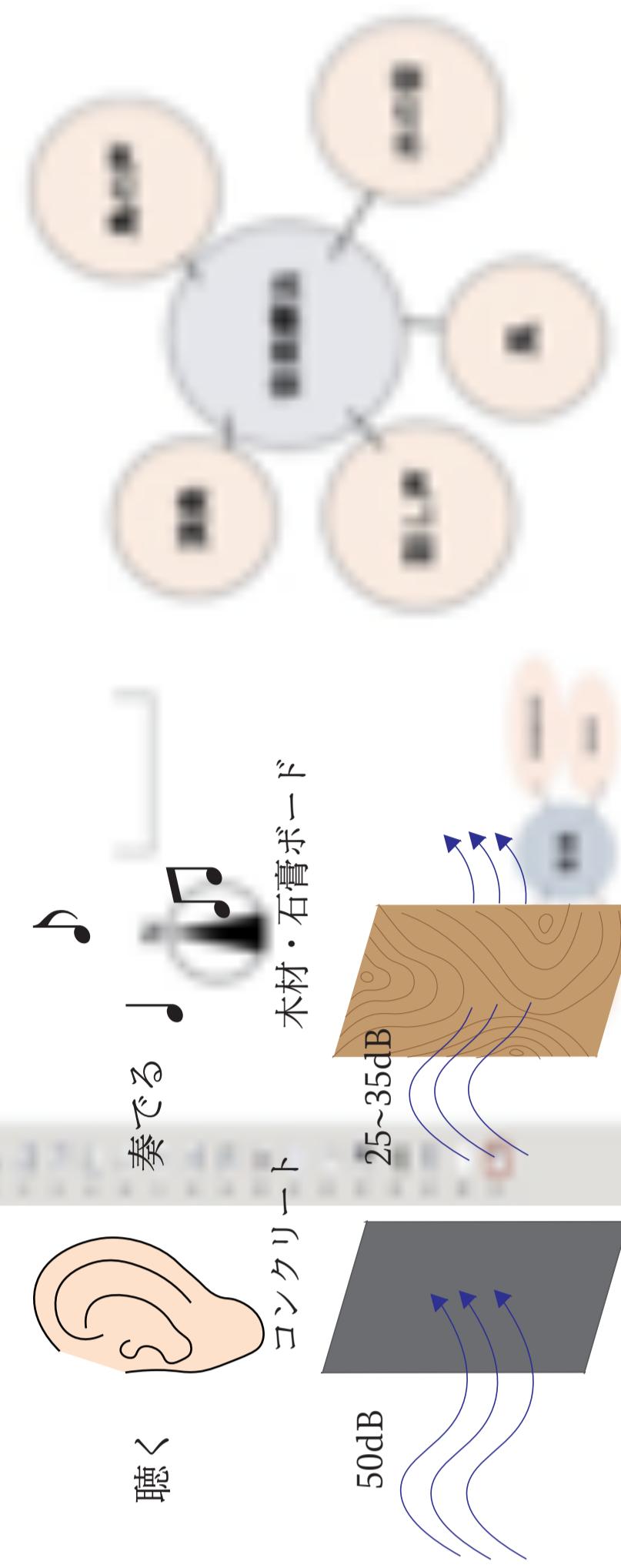
03. 音楽療法

近年、日本社会では世帯構成の変化によりひとり親世帯、単身高齢者世帯、単身世帯の増加が進んでいる。これら3つの世帯は世代や生活背景は異なるものの「孤立しやすい」という共通の課題を抱えており、住環境そのものが人ととの関係性を生みにくく構造になっていることが問題であると考えられる。その結果、日常の中で他者との交流の機会が減少し、孤立を未然に防ぐ仕組みが住宅にも求められている。

住居の既存事例では、居住と交流を分ける分離型や地域の人が集まる拠点形成型が多く見られたが、日常の暮らしの中で関係性が育ちにくいくらいであると分かった。



現代においてひとり親世帯や単身高齢者をはじめとする人々は、社会的孤立や心身的ストレスを抱えやすい状況にある。これらの問題に対し、「音楽療法」は、年齢や身体的条件に左右されにくく、聴く・奏する・といった行為を通じて、他者との緩やかな関わりを生み出す効果がある。また、調査からコンクリートは約50dBの遮音性を持つのに対し、木材や石膏ボードは25~30dBと音を柔らかく透過させる性質があると分かった。これらから、音を遮断しそぎない性質を空間作りに生かす。



「音楽療法」は、年齢や身体的条件に左右されにくく、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

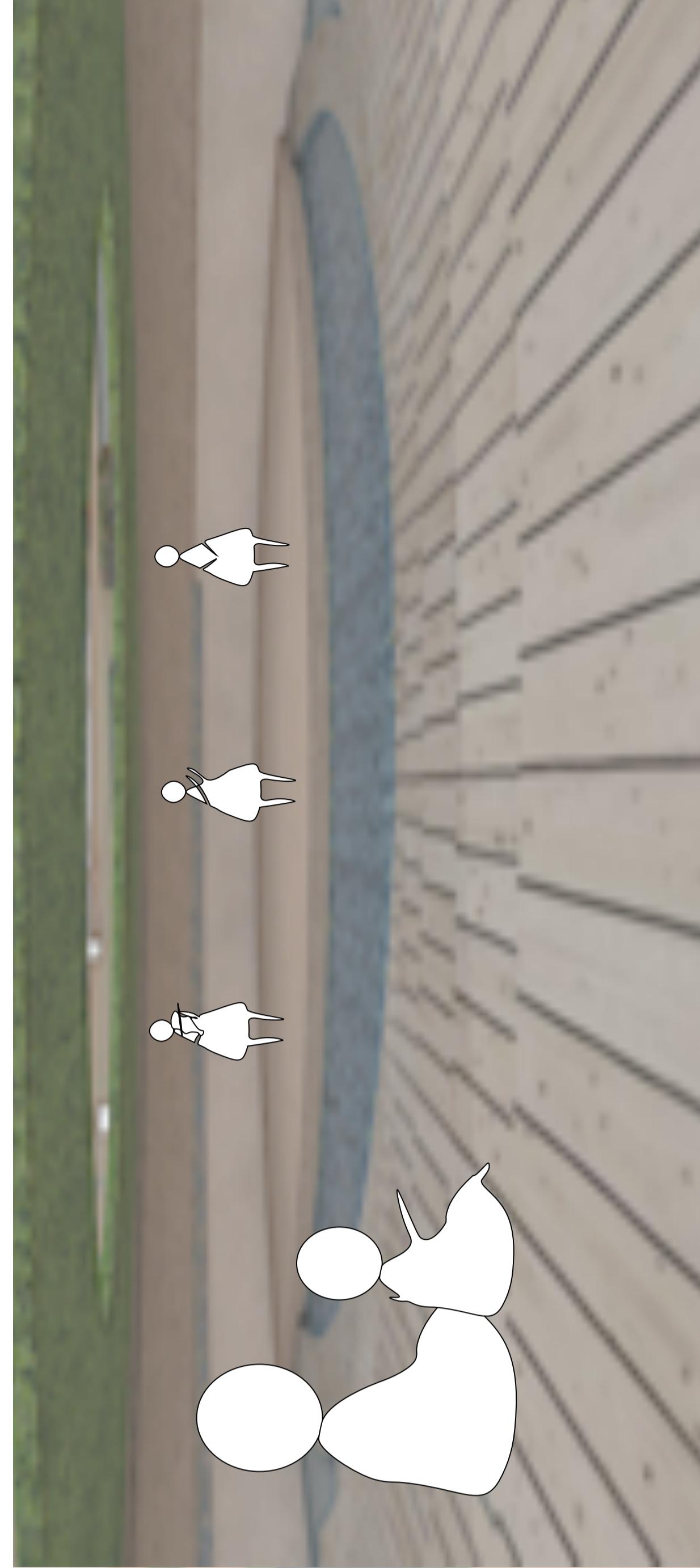
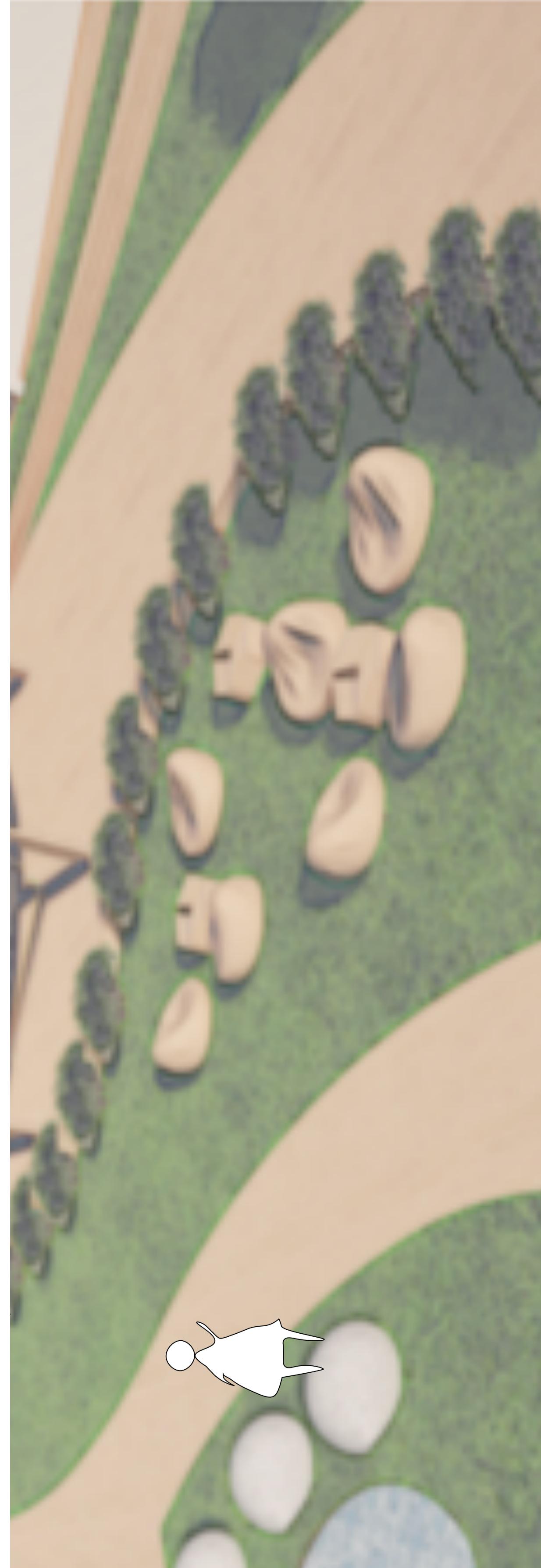
、

、

らし・ひと

和する音楽交流住宅一

岡本真弥



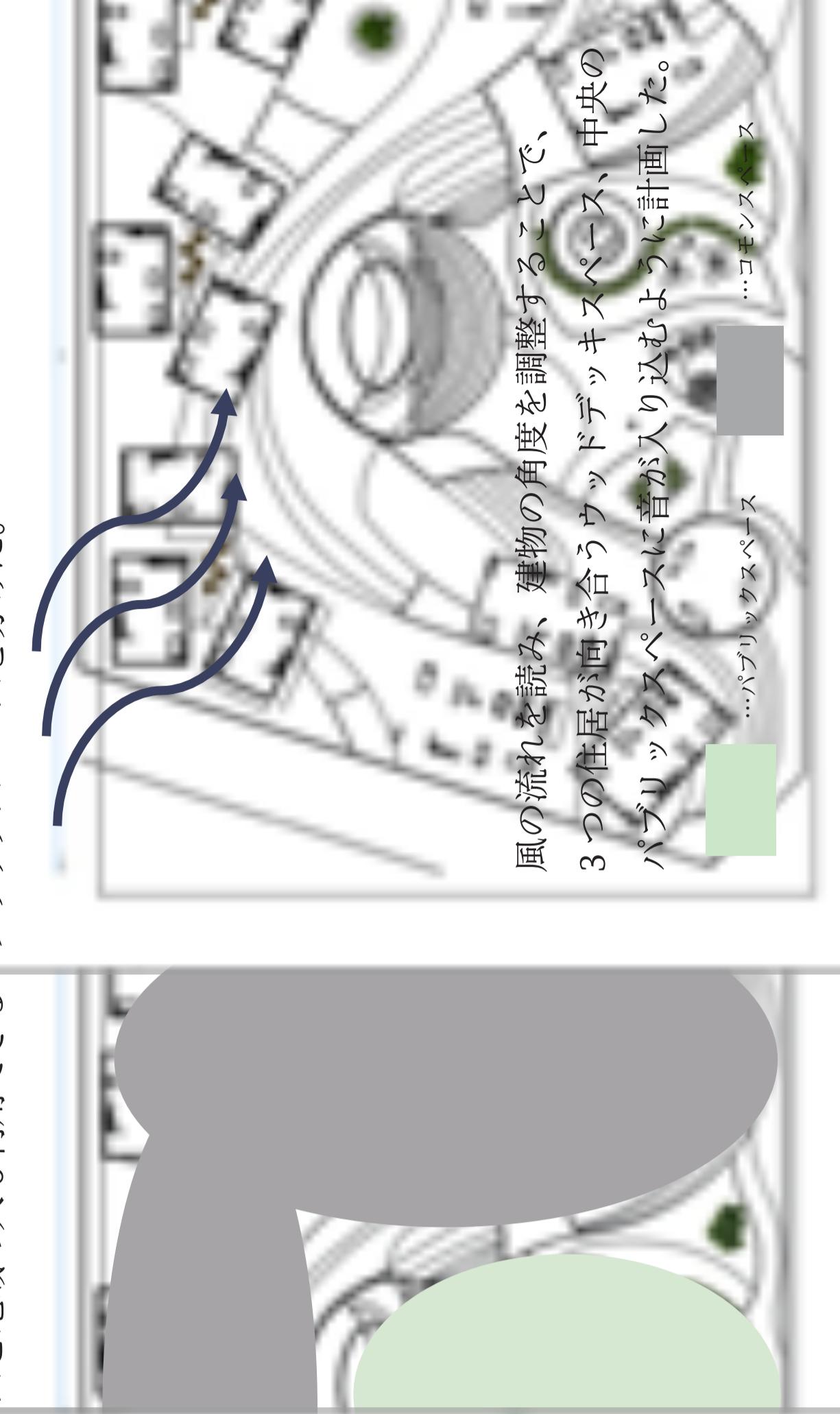
04. コンセプト

敷地

音楽を媒介として人の気配や関係性が日常の中に穏やかに広がる住宅を計画。また、全戸戸をパリアフリー住宅とし、年齢や身体状況の変化に左右されず、住み続けられる住環境でありながら多世代が暮らし交交流を深め孤立を防ぐことを目指した。

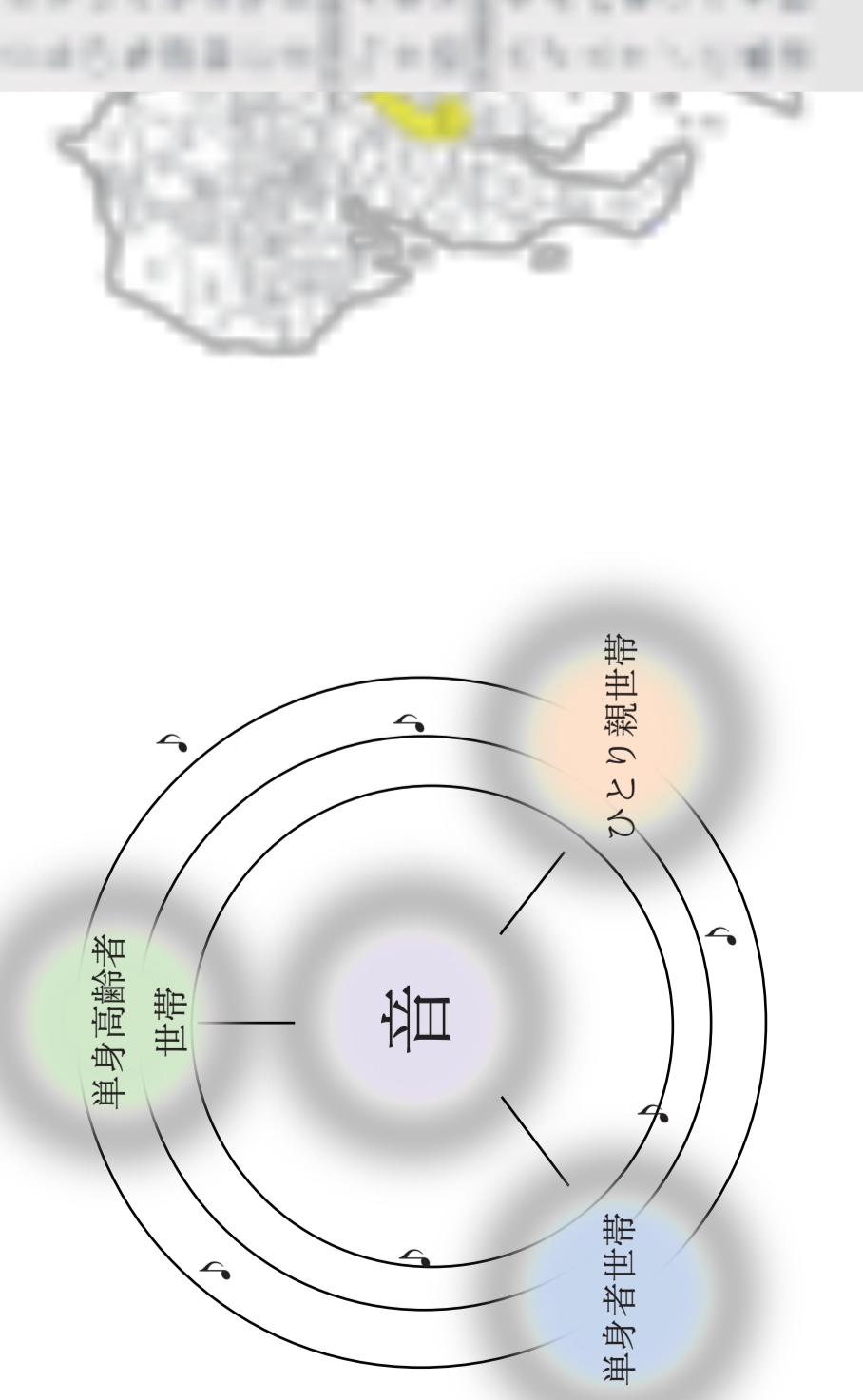
敷地は、愛知県刈谷市を想定する。刈谷市は住宅地と工業地帯が混在し、単身世帯や高齢者世帯の一方で、住宅地としての落ち着いた環境を伏せ持つ街である。都市部まで約20分とアクセスも良好で、周辺には無料バス「かりまる」のバス停や総合病院、図書館といった公共施設も多く設置されている。

住人のみが使用するコモンスペースと地域の人も利用できるパブリックスペースを分けた。



05. コンセプト

風の流れを読み、建物の角度を調整することで、3つの住居が向き合うウッドデッキスペース、中央のパブリックスペースに音が入り込むように計画した。





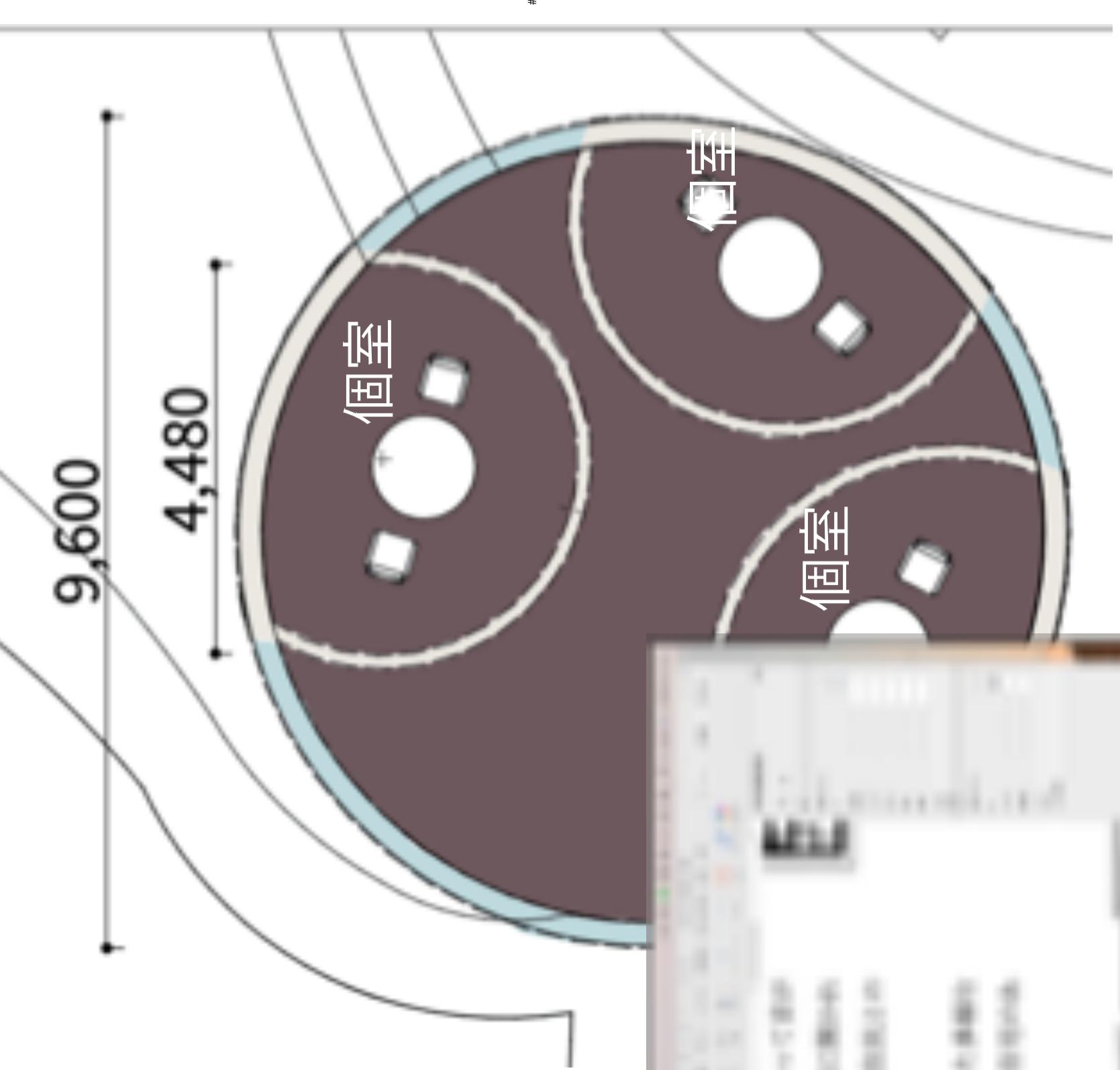
音楽交流広場

地形を下げた広場と吹き抜け空間により、上下から音を感じられる構成とし、演奏のない日も水音が場の気配をつくる。

相談室

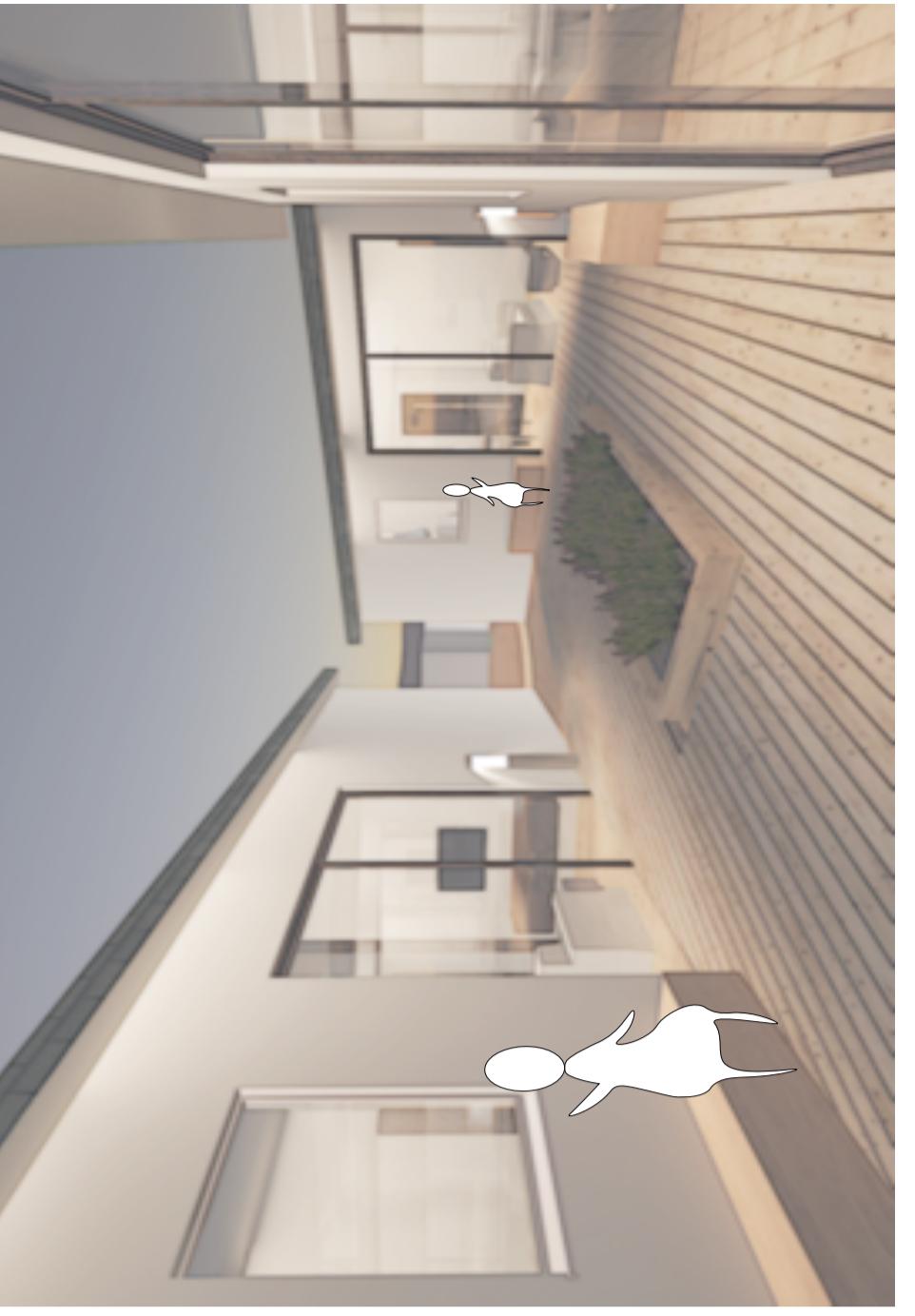
多様な世帯が安心して相談できる場を設け、居住者と地域をつなぐ日常的な居場所としている。

相談室



全体平面図 1:100

図 1:100



住居空間

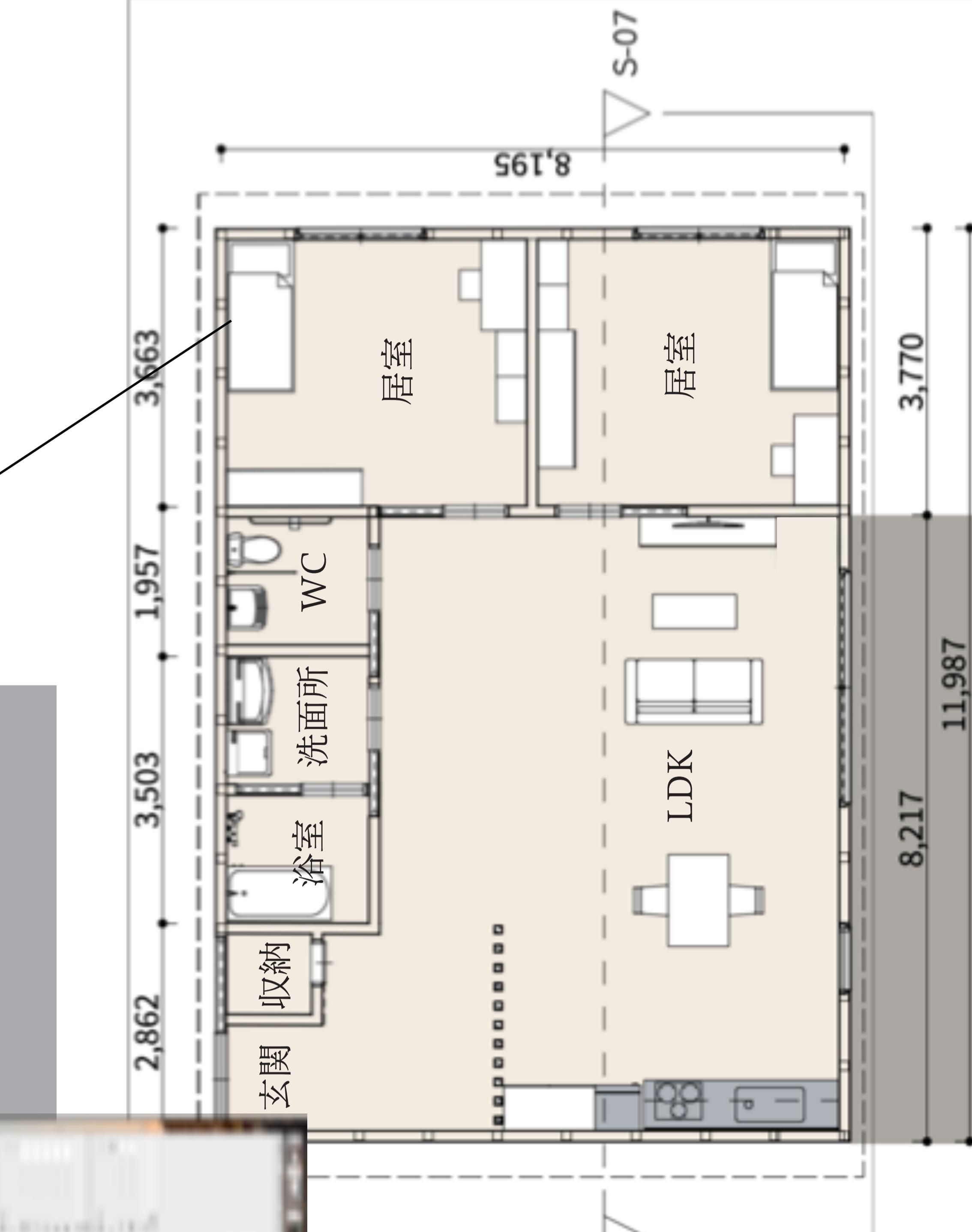
3戸 1組

住居空間は3戸で共有するウッドデッキを介し、日常的に顔を合わせられる距離感の中で、会話や助け合いが生まれ音を楽しめる共有空間。



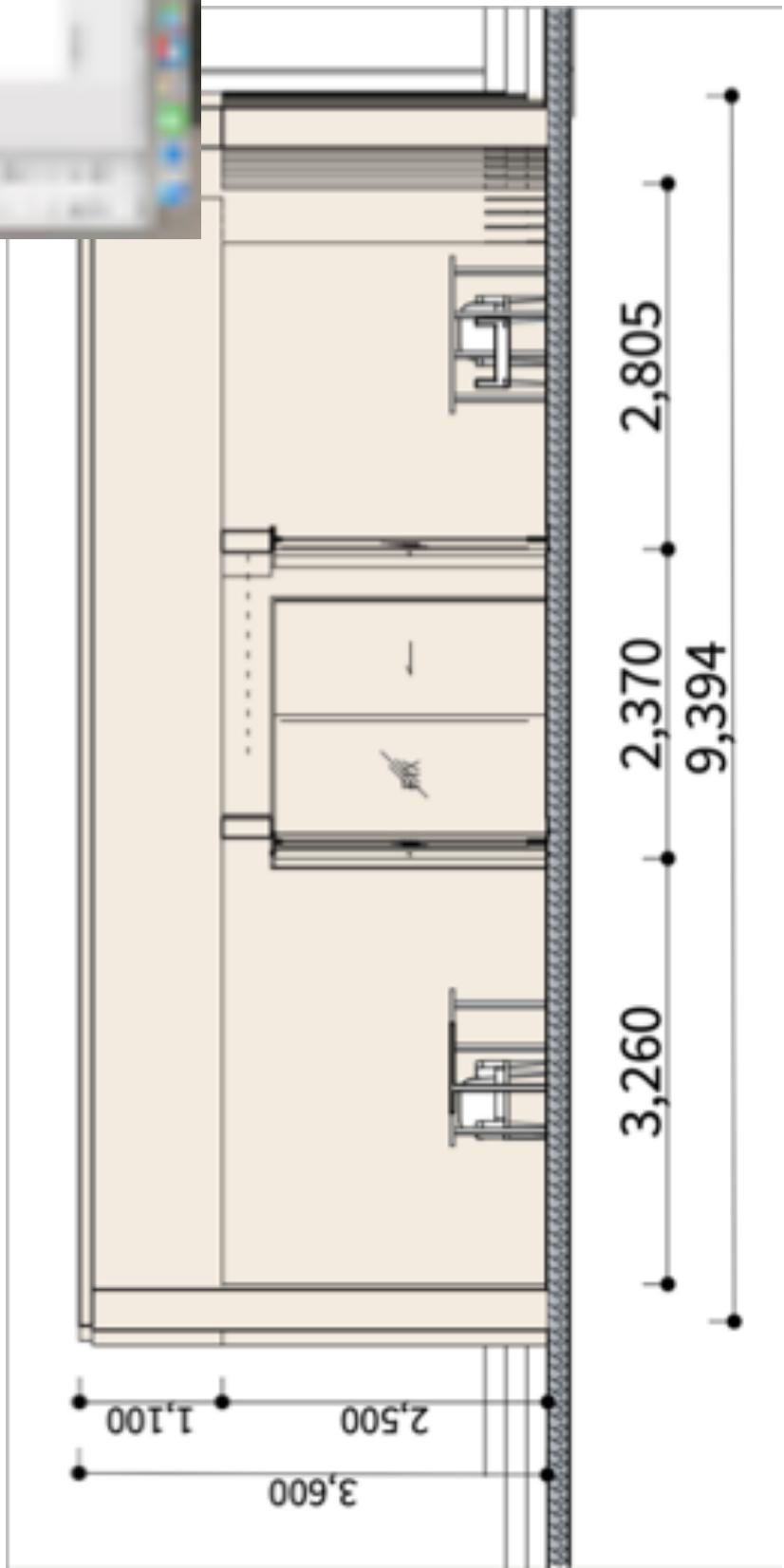
パリアフリ一住宅

宅とし、世帯構成に応じて
している。

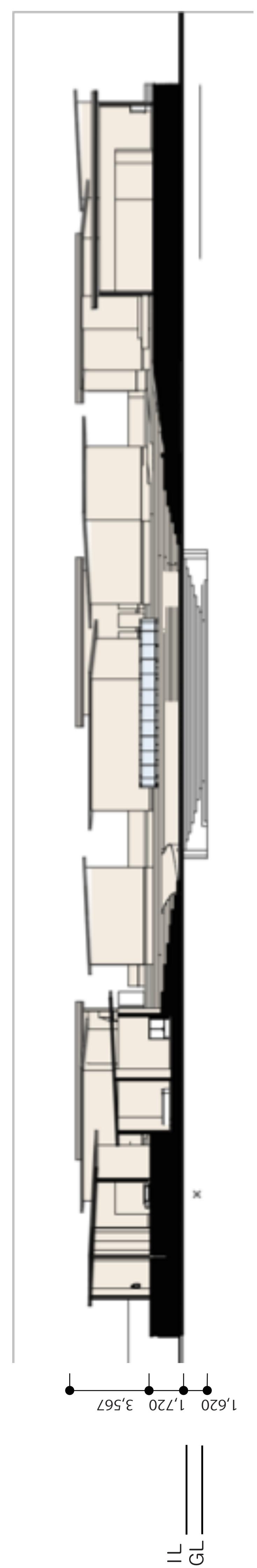


平面図 1:100

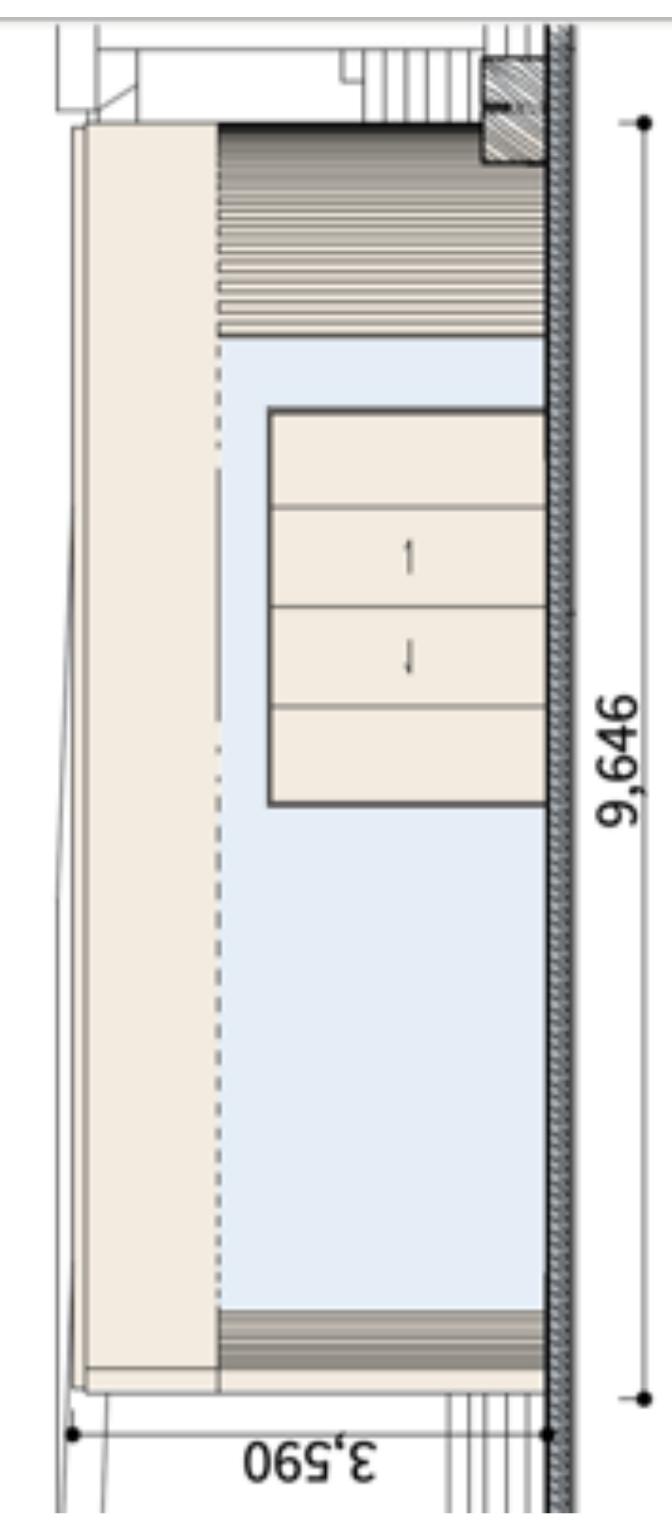
平面図 1:100



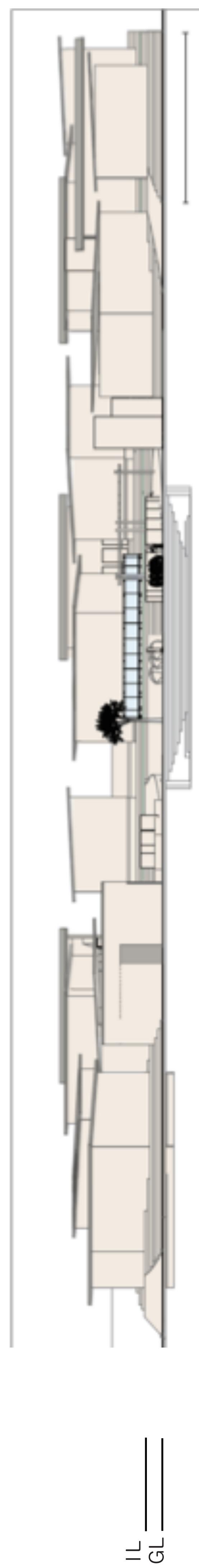
全体断面図 1:100



断面図 1:100



立面図 1:100



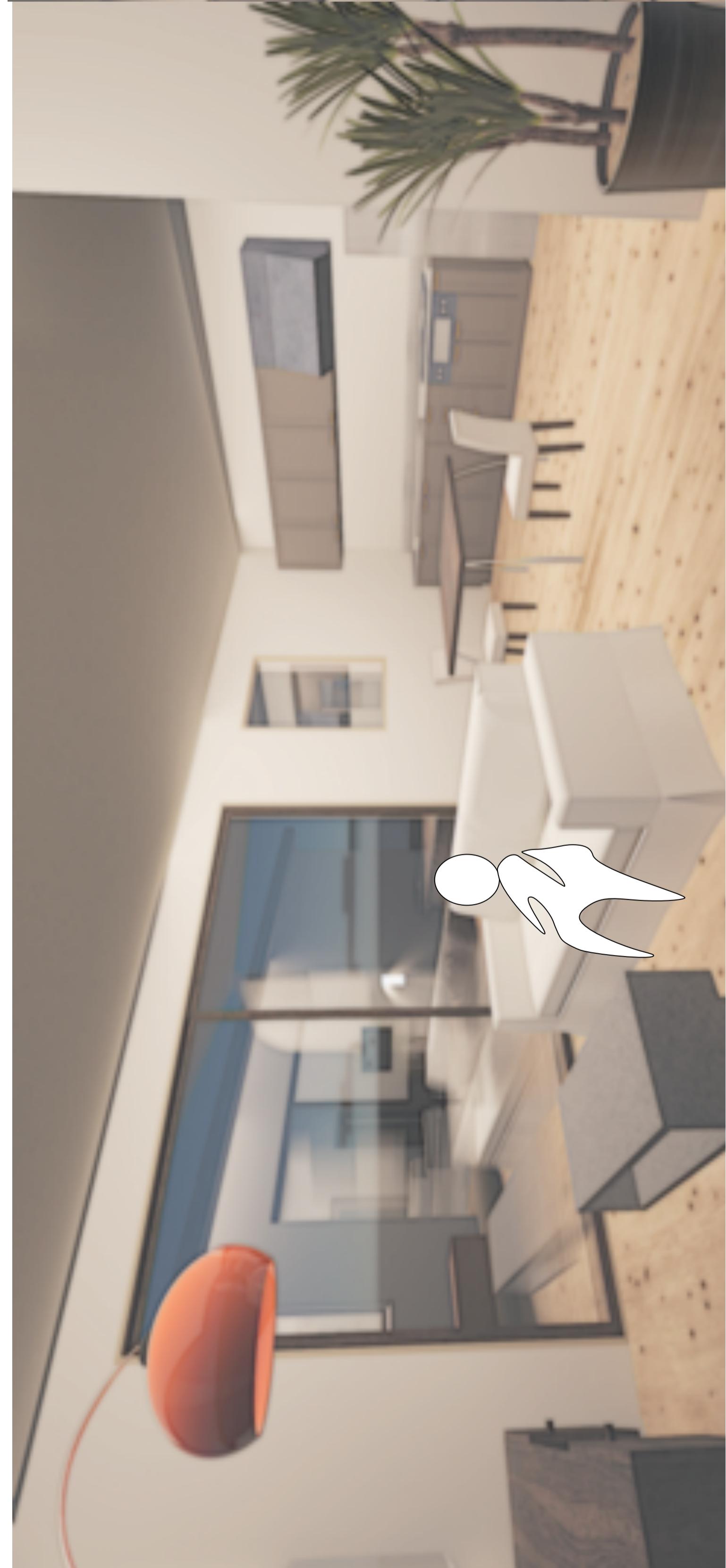
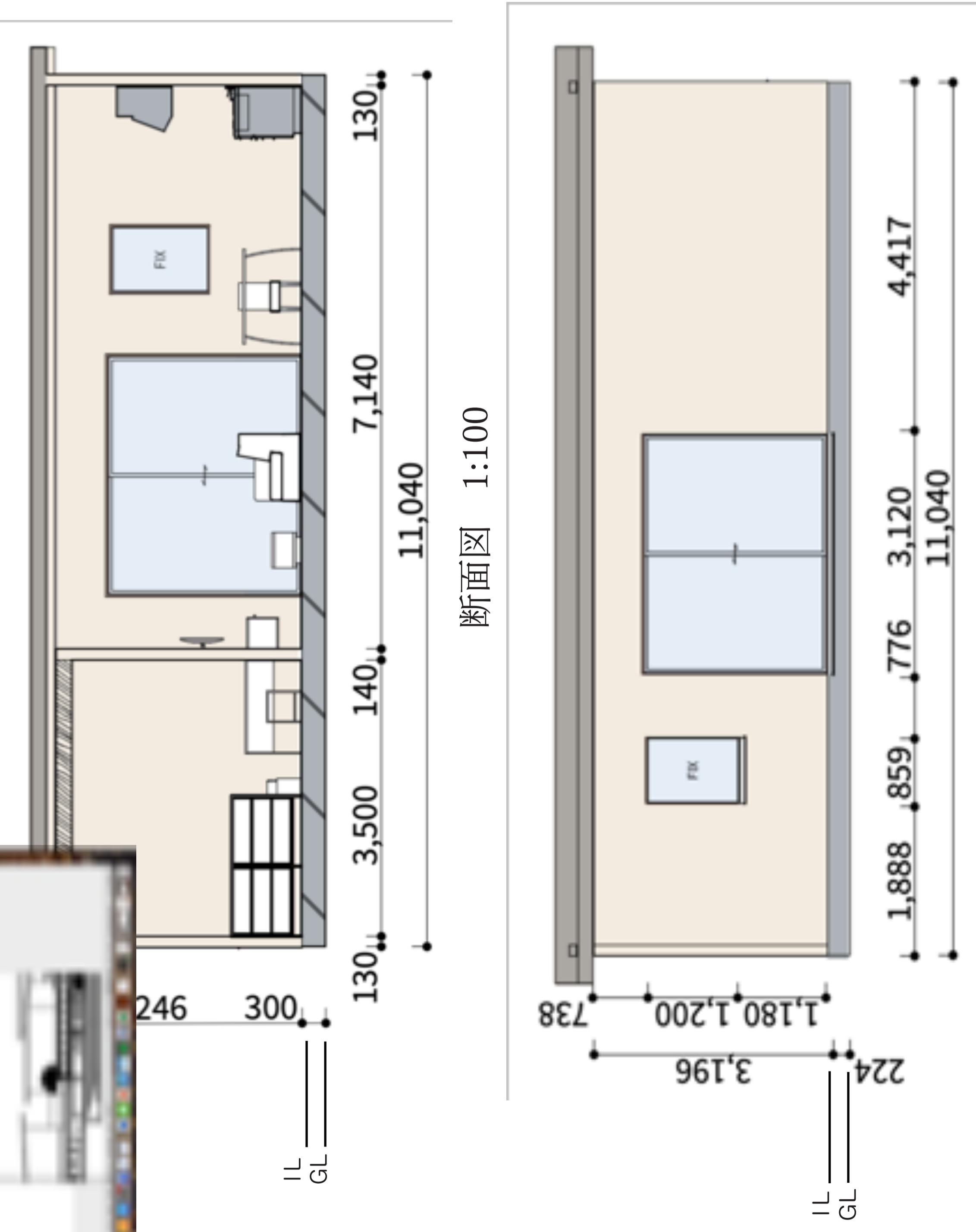
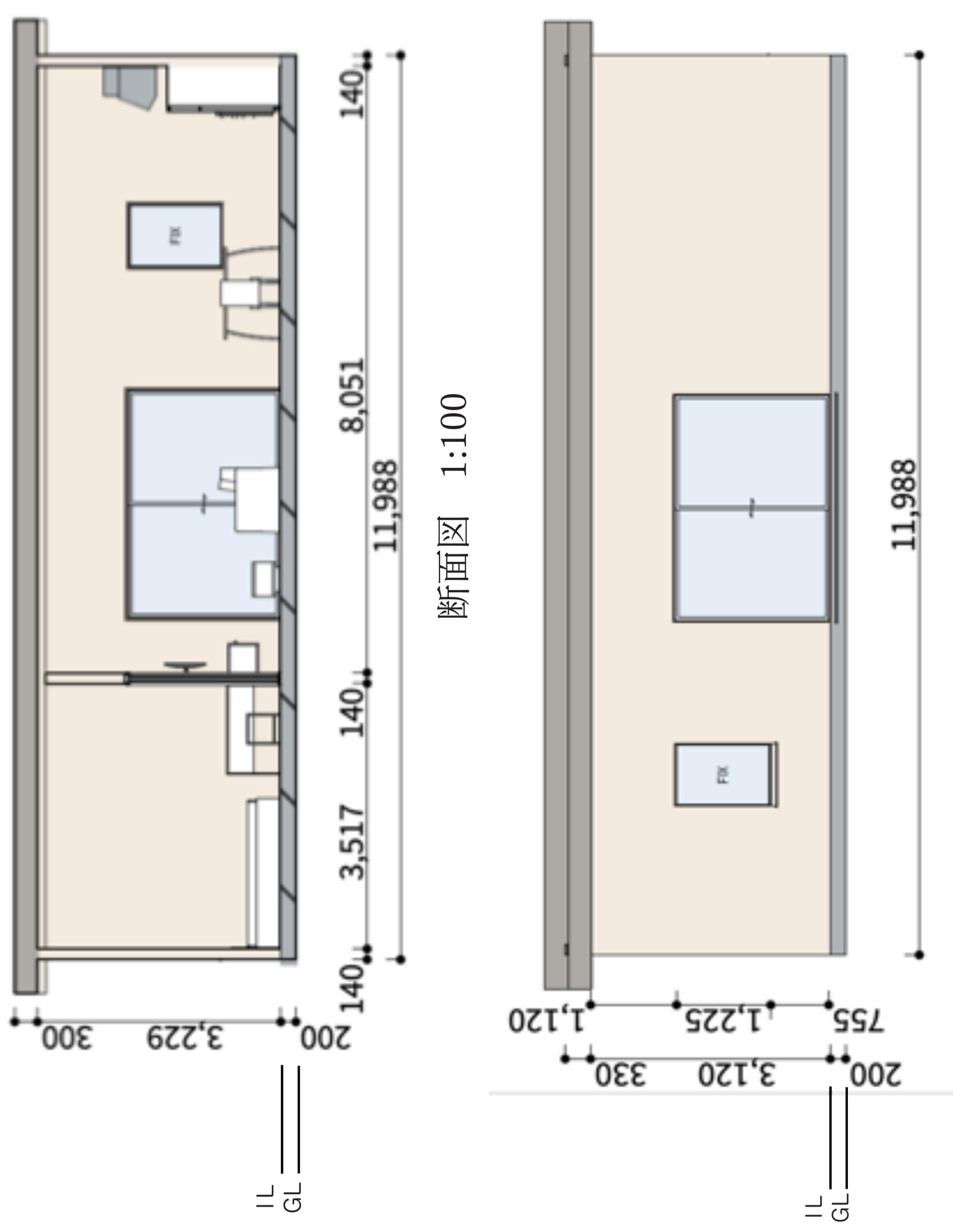
全体立面図 1:100



音楽交流広場吹き抜け上部

相談室

音楽交流広場



住居②

住居①